

戲作四書白話傳言誌全

13
1155



寛政二庚戌新鐫

戲作四書

新編 戲作四書

京傳子誌

書肆 大觀堂

序

近來世子行々ちうころよ 經典餘師きんてん

と云書と関とま子監梅るよりあんま 此おでん

より上手とゆふうんてる美味ひよ

ろくめく盲目の杖まみ闇夜の提燈あやりの

愚あほう鹵けふ八兵衛あやうともあやう 明一玉手

待
門へ
1155
巻

大觀堂
印

明治廿九年
九月廿日
購末

の八町やちやうをもも娶めとしてして徳とくよ入いの
大門口おほいしよ至いたらら一ひとひひるるれれををや
籃輿らんごハハ此こよよ志しくくりりのの者もの有あるる
○○然しかんん乾かん坤こんででくく癡ち呆だ組ぐみの
以もてて然しかんん○○カカトトミミ
狭まくく徒たハハ馴な染せんののみみやや難なん有あるる
○○ハハ手てよよ不ふ觸そ固こ
くく以もてて妻さい作さくややととハハ手てよよ不ふ觸そ固こ

や小人こじんよよしてして大道だうだうをを字まじハハ鱸りゅうをを
割わくく鯨くじらのの力ちからとと用もちがが如ごとくく是こ等ら寺てらよよハ
難なんくく人ひと彼か等らととハハ手てよよ不ふ觸そ固こ
○○ハハ手てよよ不ふ觸そ固こ
よハハ録ろく作さく者ものらら相あ應へいとと竹たけ毛げととハ
操そうてて立たちちあありり○○己おのれれ子こ牝め紙しをを編あむむ
○○夫おとこ夫おとこ大だい樂らく通つう用ようととハハ申まをとと

○も永永通室の貨具も何れに
豊後申と号とも兼好
法師の類子のゆる糸ハ戯作
の四書とハ恐あり顔觀ら
海もたらうりたれと頭
巾と見せて頬包亡女言か

道寺木曾海道近道の抜裏
も至る野ハ芝蘭の室鱧の
店よりかんバ一さど一度嗅で
實子入と虚々邑の瓢介
等が鼻毛よとんまる糠娘
こいくとらちあや道ハぬ
爾



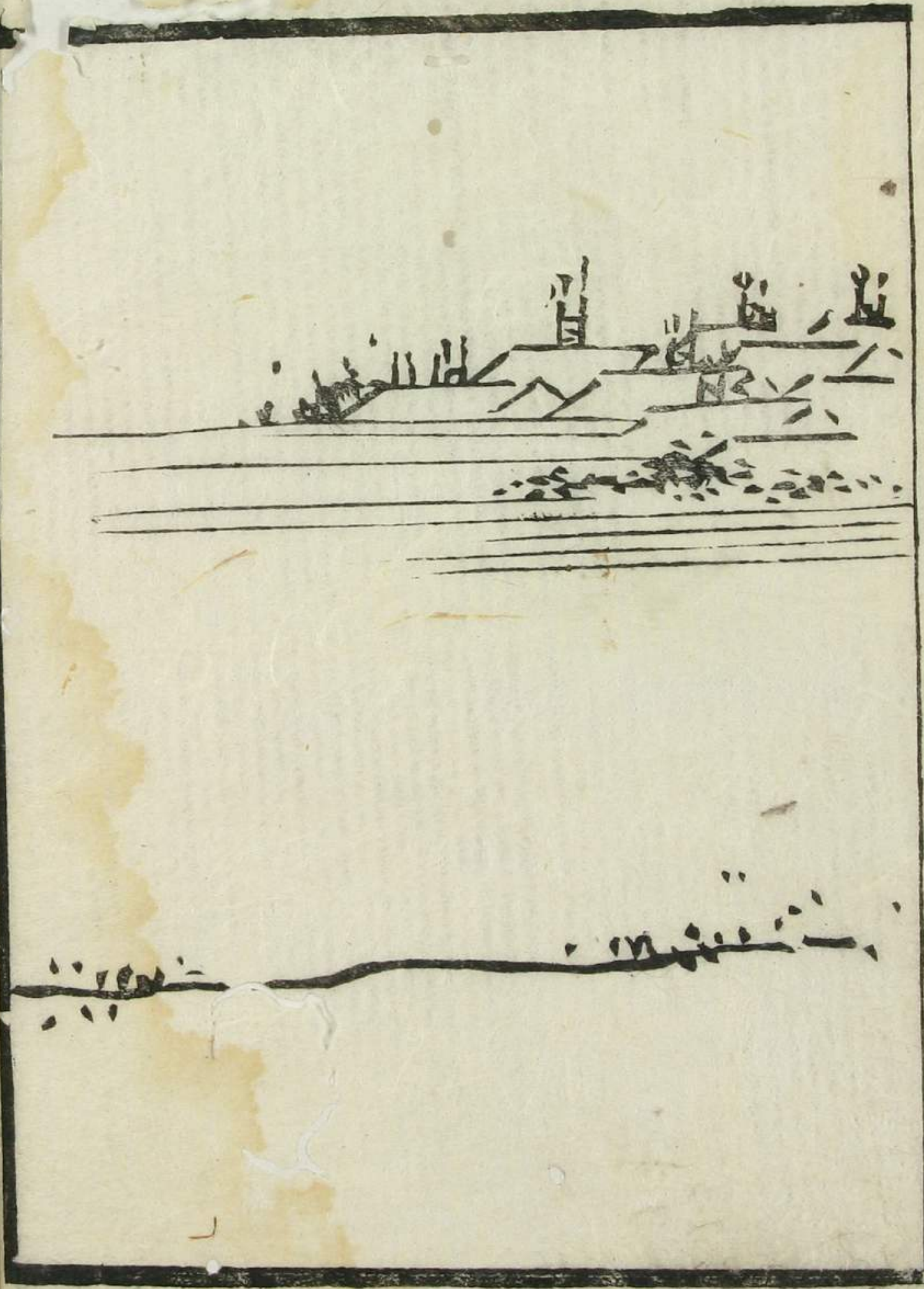
山東市隱

京傳自序



峇

寬政二年庚戌孟陬



戲作四書京傳予誌

目録

○大樂

大赤へ月雪花をおさねよはるひ
色とゆとあふのしんできりことを
あうさうをりすむ

○通用

通用ハ質物の通用おのりま
していとらめんの如神實次
あめを

○豊後ぶんご

豊後のまぐてに戸びりやの
とんどやうとらうら

○申まうし

申はまうしんとのまふて
とらうらまふたむた

大樂たいらく

意氣いぎ狂きやう句く

堅衆けんしゆ曰い大樂たいらく功者こうしや之の虚言そま而して
兎角とくかく入い欲門よくもん也なり於お隙ひま可べ見み通と
人ひと為な樂らく氣質きしつ者しや獨ひとり頼たの金銀きんぎん之の
損とん而して貪ひん乏は次つぎ之の客者きやくしや必かな由よ是こゝ
而して迷まよ焉なり則すなは庶ま乎や氣差きさ矣なり
それ大系たいけいれうらうとらうらまふたむた

浪子なみのこののどびて身代みしろのひくことあり
も思おものれど意いの測はかり乃な海うみ子こんまり
てれん手てんごとの小こ栗くり奥おくの系けいどこと
ありていふドめてとどろけどもよそま
さこたり或あるは上うへ野の庄しやう屋ゑ山さん花はな鳥とり山さんの花はな
ふふふふ幫ばう間かん藝げい者しやと引ひ連れんてい諸しよ行ぎやう無む
常じやうれ鐘かねなりもやしくむしやうよ散ちり
くる紙し墨すみの下したりと念ねんひ武ぶ家け方かたれ血ち

氣盛きせきありいい美み子こむらじれんドめい
よいさうらんよてとてい少せう錢せんのりぬ
樂らくとむけ一日いちにち金かね一いっ分ぶんの借か馬ば車ぐるま鞭むち
うめてまを猪いのの游あそ山さんもくさよよ忽たちか
の約やくの年ねんづかゆみて大門だいもんはよに
あぐ中なかれ野のの森もり採とい寛かん保ぼの昔むかしよ
うらうねど人とまかトかしくさる穴あなは
の君きみが名なびくれの甚せい々々傍はた路ろの山さん

とふー様もひんふあふくうんくれて
 はささたよんくろくらののくろーれを
ゆこたを かなれしくいふまじらりつ
 ー同子まき紫山時毛初堅魚ら
 かくれ声よんぐめてふづきのら
 夏が来るとよふを今日うらのりくざと
 壳よ笑くいの居饒子まねけのまこ
 衆人とん由の其居饒のらまこら
 と下へくーとどけつまらりの二をん衆
 既らひらひよまてまうくくーくた
 やうふおをてふささりせあんと
 おしらふおららうの周り雲よてを
 さやアうれとんふまきめさのらま
 とマアーツ香うよふのイエくたねふ
 ちあせんとふささりまねぬとりのく
 とあさーのささひららぬまの喜原
 ーツのこーツのこつひのぬり人張

こふ貞骸の戯れややんこ凡まてい
のらとと憂世と悟教あかも突ら
鏡かゝ細のまけとて今持あま
まんかめりりて思ひいあし物よ
感うも根う己う心の欲うあま
ころのまを志と得ぬあくの迷懐と
クーは限者も残りあうハ生者必
滅の場あへ氣もほくまう陰う

舟と呼ぶるも岡燒鏡の謂あま
びうの目もくれぬや舟よの目と
いひーがけあいの目もくれぬあま
うらあのかうてあまあまさんと神政の
何某が水室よ下知して隅田堤乃
下あまあまよせ中田あまうむさうや
あまーのあまをのらとのがせしてま
崎の崎玉屋とらあまうら涼とい

つをらんも色いろのニツ子而の己ことま
 るえらり文月ぶんげつの廓くわくの燈とうは妙まう又また町まちは
 照てりり總角そうかく子こ棒ぼうがののろとも
 ちちりくりく 闇夜やみよとああくん景色けいしきを
 郭かく母ははよとり つつぬるてうらん
 客人の身みよりああぐれかー金玉
 へへくくぐひ唯人の氣きをけりあ
 くらせんまの志しりよよいいの密みつの目
 をおおらうらうせさうに肉にくくくれう
 くらとああれど銷張しょうちやうの燈とうは妙まうと
 りてんゆれど如痴にょちのこころあある胸
 のうらりのことことももんんとてこのうら
 みのい硝子しょうし細工さいこうの石いし君きみとさうささつ
 るるくくくく思おもひひこれこれももそのと
 ころりの正徳せいとくの昔むかし中なか万まん字じ屋やの玉たま菊きく
 が追善おひぜんのこころああるるががくくくくめめ

ふれど今もそれよびさうして衆人
と迷りて^{まよ}恨^がのありざらとふあり
色^{いろ}の附合の句よもまよとらあり
まよりのいらとく燈籠のさらくる
とまよとふむあり十五夜乃月
ふよのちも^{あや}も今宵の月をめで
て詩と作哥と詠一^{うた}句と按^あど
又け夜色里のあざりひのこふ

さらりちりけ日深川八幡の祭れよ
て土橋仲町三櫓^{やしろ}新吉の石場よい
くらまで一年の大紋日月人と祭
れとと兼伎^{あま}一^{あま}遊^{あそ}び十日より
川^がも一^{あま}夜よちりやしてつけの
がせとありりとの百姓とあり店
者のれは百日の説法も屁一ツよ
放^{はな}て院をひらくか寺極のりこれを

生如の月よあついでつゆのよハ陽春の
月えとあられり旅行の月も一
風流と南驛の傀儡くわいらいよろらこみ西
松坂村田新叶うまよの己がさめぐ六六の
氣位きいよたり髪かみのちけれありう安
房上徳の月えそ奥一田毎たごより
手とりと考かんがへて笑えんすいん伯母捨山
のとりが月業いごうとさうさうかまうでも須

たぬ龍りゆうしくさうとハ撮とと氣ハむ
し中ちゆうふさる梅うめのまらりうゆる後金
散ちりして遊あそぶものりそり端はなぐ一乃
いささりあり色里いろまそで月の老いり
のりあつてまお恋こひの月ハるる
どりり喜梅きうめの月ハ今さうりよ小
夏なつたり亦海安寺正燈寺しやうとうれ紅紫べにむら
んよハや今さうりつ原

息子とりぐ 化粧のそえがう
てんてい 鬼佐里よりけりてあまの丹
楓の錦より 正生の紅圍の錦よく
るすうりく 糸こ又りさうりれどあまの雪
んとて 家根舟子 居火 燈うらさふ
わらぬあんのるの 晋の謝安よすけ
ぬを氣で 別條の妓と 推乃雪らんよこ
ろぶあまをとりあふよよくかあひ

こどもが 勝よりむりふ 雉のこころ 深
舟の心 意を乳もつらありなりり 暮秋
の角力三ツ井 戲場 秋の梅江
乃 雉の月 入玉川の 鮎 拵 各間の和
紫 入 金 沢の 雪 入 四季 初く け 示
い かなん 登り 難し 是 天地と云 細
く 一人の 大かうりよしとあし こと
くらことあし 志くれども 示 八月 雪 意

のニツ子とむむとひあがらつまる
雨の女色よめいろやその雨のふり月つきの
清きこととて女帝の胸むねの鏡かがみよるる
雪ゆきれ色いろ白しろありとて抱かかて寝ねした
ゆゑもあく花はなののちぬ六むあつ
くしとつては舌しんもあくはそあより
も眉まゆの月つきとまうり肌はだの雪ゆきとあざ
ひき次女つぎむすめの姿すがたをうらむらさせ雨あめよりのま

ど嵐あらし子こららぬ美人びじんをうらむとあつむ
やと如何いかんかは樂たのしみれあらんや花はなより
園うゑん子こ色いろ氣けより喰く氣けの飢う饑う年とし
ふ生うまれさ人の言ことばあつべしこれ無む
量りょうの味あじひある女色よめいろの極ごく意いあらん
及およどりしと衆人しゆじん皆みなを子こ月つき公こうまで
今時いまときの樂たのしみとさうらふはまうらふ
女色よめいろこつちらあり昔むかしも人ひと情なさけよる

るるみ多く夫子衛の君が女子のら
とこそそとけれりまじ徳とこのむの
色とこのむか如くまらりめとこそ
と目になり鬼角拾う死にけ
の選ひととれり然れども富
れらりありて艶ありありみ
くても雅し花がうつくしとこそ
る山は居續もあらは月の明あり

とこそ引窓うら見ての真もか裸
で雪も面白くうんばあみみ
女色よととびるとのゆかか
まら知金ちりり金とくは
愚るも奇才ととられや
も貴人く鶴子のう鯉の糸ド瓢
うう駒と出し石とううて羊と
と仙術うりもうらうととて残らぐ

猪牙の天へののがりにツ手撃の申
ととらふとこれ金佛の勢ひとあら
とさうりあうらば金あつての樂はふ
らぬらと思ふどらうしてなま何ら
龍淵の腎とまけて枕と一糸と其
うらよありと太平ふとのくーが
とと思ふをよあといふ金よもあ
と唯むるうぐーとのをのよあこと

いふの世の考の俗物よの得る難
されば糸の糸を身よを懸ぶらぬあり
骨牌よらうと目もあれを湯よあ
うとよ夜ましてもふーこれも己が
好申のこのみぢらう又女と心中
してのさういのらとつるもよあこの
らうとドらうりのちうり又ほま堂で
御極の甚敷極らんあぐら女房とも

ふ一盃のんで修あや呼よてんとなまきりぬ
天徳寺てんとくじひさりぐりてね後のちてのらるも
そのみと思おもくを承うけたりて今いま持もち
とてふふこの極ごく意いをきりぬぬが氣き
持もち散さんらるるふふ樂らくをきりぬ
て多おほくくみ子こをりぬぬありぬ
ば大樂たいらくの示しれ字じはとありて得うるわ
らばのやまらぬのふくむむ昔世むかしよの

諸しよの親おや苦く号ごうとる甚おほき子こ樂らくをきりぬ
孫まごを食くらるる一人ひとりの示しれ孝かうと
義ぎとの二ふたつとらふふりぬぬめれ
言ことありぬぬむむむむむむむむ
て日ひ幸さい一の涼りやうの場ば知ちりぬぬむむ
され貴き賤けん群ぐん集じふありぬぬ地ちも今いま日ひに
忽たち一いつ河がの流ながれとと後のちむむむむ清水しみず
ありぬ盛せい衰すいの世よの申まをと天あまの然しか

あひらぬ心ありやんよとよとやナア
と歎息するもそのれがとよひとよ
のありしり

大樂異
とらうとえぬ

通用

意氣狂句

若衆曰無錢之謂通不迫之
謂用通者半化之貧乏用者
紋日之出入其錢乃寬永年
中通寶大夫恐其久而絶也
故筆之於丈以授格子其子
霄言無理中亂寢客衆不逢

其夜爲千里語之則渡苦界
省連則恨藏於店 下畧

それ通といふんぞ列子しつることあり
徳と以て人よりう之と聖人と謂
財と以て人よりう之と通人と
謂とい言ご下つりてふれはよく今
の通といふ者よのされり然
れども金銀のらうまをやらでも

山よおちて居るあり氣質ハ安く難
得唯通と野まとの差別を知ると
以て通と謂ひ通と野まとの差別
とあらざるを野まといふらん予そ
よ通用の二字を以ていさくうまを
とんとして風諫せんま万里と井
といひ井と十のりせして通といふ
とゆつて考れば千里の外の

もよくせうららと通らるるべし
 又書の首末全と通らるるべし
 初會の首よりきれてのく末まで
 も全くとしていきさこれけりるるべし
 と通らるるべし如来よこ妙工通の
 了甘甘子圓通あり久米此仙人も通
 どうしきみての下界らりけと笑れ
 狐も通かうせての麴町の市まさら

さる吉原通深川通芝居通とのふも
 よくまらんと得らるるべし又用
 の字とらるる天地全功かゝる物
 全用かゝる人よ四用ありと人用ら
 るる時下女もくらのまらるる新法
 とのどがれ用らるる時の麒麟も
 魯人の古傘よ包まれ牡丹紅葉
 類とあらん又傾珠の言よ金銀と

かくそく一飲日物^のとこのむこれ
と總て用といふあり又多^きあり
あつら文^の用^ののあつたためし
酒屋^の内用^の御用^の外車^留られ
等^のまのりも説^のあつ又通用^の
づつ^の質^の物の通用^ののりなり
これよつて頃^の日^の一ツの奇談^{あり}
らまよ表^の徳と鳥有^のとら^の者^{あり}を

又代^の飯^の器^の車とまけりるわの
くく一あれを何くくく一盛^の
傾^の味^の買^のよ^のと^のぬて花^のよ^のめ^ので^の月
よりく^の雨^のおも^のえ^のの^のび^の鼠^のよ^のも^のひ
客^のの^の鼻^のひ^のく^のね^のば^の和^のの^の時^の居^のを
き^のと^のせ^のと^の元^の且^のの^の庭^のの^のく^のれ^の火
より大^の三十^の日^のれ^の恰^の賣^の來^のる^の頃^のまで
月^の雪^のの^の三^のツ^の層^の園^のの^のよ^のは^の産^の

て他念^{たねん}ありうゝもそのとどまりる
 とありて而^{のちよ}后^{のちよ}世^よは隠^{かく}れえとて葉^{この}
 蕪^{ぶらぐら}の別^{べつ}業^{ぎやう}よひとてみ孤^こ獨^{どく}の^とこ
 も世^よとのちよとてみ^みる^る知^ちあり
 されば昔^{むかし}とらるる杵^{きね}屋^や流^{りゅう}の^の味^{あじ}
 線^{せん}も心^{こころ}の根^ねメ^めよりけ^ける^るぶ^ぶう^うの^の味^{あじ}
 洞^{どう}子^しの^の味^{あじ}れど^ど真^ま反^{はん}世^せと^と登^{のぼ}り^り千^ちヨ
 口の^{くち}帯^{おび}子^こ饅^{まう}び^びる^る意^い鄙^{ひん}も^も心^{こころ}安^{やす}な^なれ^れが

ひと^{ひと}不^ふ任^{にん}者^{しや}屋^やの^の煙^{えん}管^{くわん}よ^よ心^{こころ}の^のや
 あと^{あと}通^と一^{いつ}小^{せう}人^{にん}閑^{かん}居^きして^{して}不^ふ器^きと^とか
 との^{との}り^りま^まし^しめ^めと^と考^{こう}よ^より^りと^とれ^れぬ^ぬバ^バク^クん
 し^しや^やも^も片^{かた}肌^みと^とい^いれ^れて^て臍^{せき}下^かよ^よと^とら
 つ^つき^き腕^{うで}の^のい^いれ^れが^がら^らも^も外^{とち}山^{やま}の^の形^{かたち}ま^まひ
 と^とく^くと^とん^んく^くよ^よま^まと^とて^てあ^あく^くか^から^ら
 額^{ひたい}ぬ^ぬま^まの^のげ^げー^ーも^もり^りう^う角^{かく}と^とれ
 て^てあ^あら^らふ^ふ眠^{ねむ}る^る手^て枕^{まくら}と^とお^おど^どろ^ろろ^ろと^と

ハ誰と時宗ふあうぬバ祐成が幽
冥よもあつたとき時あうぬバ池
の水鷄とも思われど羨うううが
と首とのぐればさうともりい
於冥形の怪あゆりつれさうり風
とあううううううううううう
くくくくくくくくくくくくくく
白果をつうぬく鳥有ハ一目スううう

氣も魂も天上へ飛でさうふんが
地はあうりりりりりりりりりり
願しと思しきがうううううう
てやうりりりりりりりりりりりり
るころころあうれ我くハ壽永の誓西
海よあうりりりりりりりりりりり
らどど化物屋敷の煤拂でもあう
質物の精あり世の中れうううう

のありまづり殺されて縄目の取られ
うけ七ツ屋の殺まきづめられて
流ともやうぶと流もあへど迷ひ者
ることくらや八ヶ月まどぶら夫昔
より質と云おあまらあしよと
場ま人質あり喧嘩ま言質あり
借金と質まどくとい女房が自販
と切る時の捨言葉ふして流あめ
の

舞臺と同日の強かりむうーさる
何某の上人とうや十念と質まど
るころころありーが貸ま十念の
うら一念とめどさど放まけし人
酒九念のこまらじらるよりて九念
寺と云寺号何所より今よのころ
くらよーとゆまくまうれバ佛の方便と
もあり又家と云字と質まどころ

連^{れん}が際^がもあ^れば風流^ののな^ももあ^れ
て古^こ人^{じん}訥^{ねつ}子^しの己^こが名^なと質^{しつ}子^しと死^し
らる^ら鳴^{なり}のり新^{しん}田^{てん}義^ぎ貞^{てい}のこがね^ねに
くられ^れち^ち刀^{とう}と相^{さう}州^{しゅう}鎌^{かま}倉^{くら}稻^{いな}村^{むら}が^か家^け
の海^{うみ}中^{ちゆう}へ質^{しつ}子^しを^まつめて軍^いれ利^り運^{えん}と
新^{しん}神^{しん}子^しを^まつれ^れる^るのり龍^{りゆう}神^{しん}と
れと感^{かん}應^{えい}して彼^あ太^{たい}刀^{とう}海^{うみ}より浮^う流^{りゅう}
し^しと^とう^うや^やこ^これ^れ質^{しつ}子^しに流^{りゅう}る^るとい^いふ^ふ言^{ごん}

跡^{あと}り^りの^のい^いし^し耐^{たい}より^りれ^れる^るの^のな^なり^り今^{いま}
子^こを^をあ^あと^と質^{しつ}子^し利^りり^り瀆^{とく}と^とふ^ふも^もい^い所^{しよ}
謂^いふ^ふも^もを^をぐ^ぐ又^{また}質^{しつ}州^{しゅう}と^とふ^ふ言^{ごん}よ^よ由^{よしゆ}
て^ての^の萩^{はぎ}の^の上^{のうへ}借^か萩^{はぎ}の^の下^{のした}質^{しつ}の^のり^り或^{ある}は
燕^{えん}と^と一^{いつ}の^の入^{いれ}る^るお^おの^のり^り天^{てん}地^ちも^も又^{また}質^{しつ}を^を
の^の度^たと^とら^らる^る受^う人^{じん}の^のあ^あと^と質^{しつ}
お^おと^とら^らる^ると^と火^ひの^の次^{つぎ}人^{じん}の^のあ^あと^と損^{そん}嵐^{らん}
食^くひ^ひの^のあ^あと^との^の損^{そん}と^と提^{てい}れ^れよ^よと^とく^く

あると或ハ質よ曲ろと云言めつ是
十の字の尻とまくれり七の字と
あるはよりとさうりーさうつりある
きーせつ屋、晒落るも則は曲らん
ならそれもさうさあんなよあつ雨ハ
唯ゆひとまゆけてさうそれハそれとさ
とろならりさやれとさうさあんなよ
ゆらとさや唐土よもあつとさうんく

質店と印子舗と云質物と典貨
とらひ質れと當西云と云俗語
ゆり固我くの物まの身がわりよと
らて愛らんあんとさうえ火急の難
そととらよりのあつに今つらこらう紋
増子身とありららとさうさあんなよ
れば我等とさうさあんなよさうさあんなよ
或ハ女郎とさうさあんなよ親ら

ゆづりれー 敬養と家質よのれ其
又女郎も万夫よ抱ひてとらん程と
あり并約下弦禪まで質入して苦
累十年損料屋のありよくらゝあり
或ハ初堅魚の石代は給とくらゝめ
くらげ江戸ツ子れ尻の穴の廣さお
と隣家れとくらゝととくらゝと
これと喰ひ又一人の娘と人質よ

入て抱棄ようらとみ又ハ又腕のこ
づゝひある夢をたのそて富のれ残
笑さるー主人くらゝひとあゝ保
仕るせの布子と教もあり武士ハ
ふまらうあゝね大小もまげ出家
ハとぐあ公の佛像までもまげり
げふ質とを並てうひのりあゝい懸
とらけてあゝと知らざるがとくらゝあり

とそも我^{われ}くつうくろあうど利
のびとさるんよとがもふられば
牙^{クガ}の氣^キよらひさるれば巖^{イハ}の柙^ヤ原^{ハラ}
の干^カ店^{テン}よさうさるんけ恨^{ウラミ}とさう
さんよの貧^ビ乏^フ之^シ神^{カミ}の末^{マシ}社^ヤとあり彼^{カノ}
恐^{オソ}不^フ知^チの徒^トが皮^ヒ肉^{ニク}よりけりり長^{チカ}
く是^{コノ}等^{トウ}とさうさるん世^セのいもあ
まうともせうちの介^{サカイ}あればけるさ

かろうさうせ世の中れ不^フ埒^{ラシ}者^{モノ}ども
よ傍^{ナド}てのりらひうけりさるんあて
のあま^{アマ}と周^{シュウ}雲^{ウン}質^{シツ}とさるめかうれん
得^エさるんと質^{シツ}屋^ヤ地^チ獄^{ゴク}の妻^メ良^ラ大^{ダイ}王^{オウ}
ふまをら^ラれいとあま^{アマ}とさるひこれまであ
らわれか^カらさうやとヒウドロくの
あま^{アマ}とさるりか^カさうり^リとさうさる^サる^ルふあ
とさう^ト南^{ナン}風^{フウ}子^シのあま^{アマ}と海^{カイ}月^{ゲツ}のごとく

あつらひく〜うせよなる鳥有も始
のやどいおそろ〜りりしが質物の
出天子^{あつらひ}きひ〜るの吉^{こころ}今子奇^きあり
るるあれを彼^{かれ}等が速^{すみ}懐^かあり〜面
白く有増^{あつ}とおろ〜と予^よ子^こかたり
しが彼^{かれ}質物の精^{せい}がひ〜如^{ごと}くも
今^{いま}銀の多^{おほ}き申^{まを}ありて質と〜と
うける心^{こころ}がけ^けあそい^い恐^{おそ}と〜うけてひ

と〜と二面とすぬぐれ〜恐^{おそ}や〜
ぬまの〜る〜そ^そ時^{とき}に必^{かな}質^{しつ}の怨^{うら}念^ん
とらう〜とて己^{おの}くが身^みと〜らう〜
と〜と〜う〜うひま〜金^{かね}とひらふ
ら^ら浴衣^{ゆかり}と襟^{えり}よ^よ肩^{かた}より〜て〜
よ^よの^の礎^{いし}竹^{たけ}子^こも〜も流^{なが}れいせま
と^と淫^{いん}へ〜も八月^{はつげつ}が〜てバ流^{なが}る〜あり
利^り上の^のあ^あぐ〜みせんよ〜もつ〜

ふい儉多りりら^いは^い短^いおの志^いの字^いれ
一句^いよ^い質^い具^いと^い重^いる^いり^いら^いよ^いと^い子^いと^いて^いと^い女^い
房^いと^いし^いま^いう^いめ^いー^いも^い不^い宜^い乎^い

通用畢

豊後

樂酒亭主

意氣席中

此長幕茶番而時語之不肌柳

橋乎有隙日待夜來

未茶飯食乎

人不聞而不喜不亦素人

乎

土佐上下外記袴半太羽織子義

梅を後竹のこゝろよよとくけい音声を
 うつとせられのまゝとあよよとくくも
 ろよよとせよ蝶くくとせられ放し飛く
 まとくけい浄瑠璃の節あつらひを
 くりし浄瑠璃の信長の時代小野
 の通女り牛若丸浄瑠璃女のころとけ
 くりしとらとせりころり人の知り処
 たり又極浄土浄瑠璃世界と

いふのりて迦陵頻伽の藝者でやい目
 夜浄るるとと倍てみる若井息子
 けころ或ハ年季がころのころひ
 まとけい世界とて金竹伯とらがころり
 るり不鮮といふ子識のお寺根を
 るりきれしなり斯て浄るると世よ
 流れて今も中にも後節とらふ
 のあまころりたり是れやーたれた

樂ガクれ余よ風かぜよして人と和なごまられ器うつ之
燕歌いざなうた牧笛かきふえ樂ガクあはらざるこそふ一固いっこのち
多おほ後節ごせつハ文章ぶんしょう以もつ色欲しきよく多く音ね
声こゑ嬉うれ乱らんありえられどもまことり起
ふよりてまらんざらい姑いもぢの小こ云いる士し
の雲くも云いと伊い又また子こハオオナナり試こころよ二ツ
ニツとららんうら尾お懺悔ざんげと云いよいつ
らおの字あじれ名なとつひてといふ丈だけ句く

のり曲きょく礼らい子こ女子にょし許嫁きよよめして筭そろばん而を字じ
ハ語ごよのさみり又またおまれ浄じやうろりふ
唯ただうらびひてあんよもいふべと云い文
句く阿あり詩し曰いは奏そう假かり無な言ごといひさぐひ
多おほ一いっ筭そろばんよ又またさるさ新しん乃の子こ黒くろ格かく子こと
多おほつらひ竹たけの管くだよとぞれけしう保
海うみらりれ穂ほ吉きち示しあり表ひら札さつ子こ雞けい
波なみ津つ野の路ろ梅うめと横よこ山やま流ながりてさる

たり火とや一吐くある二人の
 煮いづれも年季ののともんて一
 人の洗滌のうんをりとしてさう
 一れおぬぐひと肩よりけ一人の
 伊勢綿の布子よ棒綿のあざれ
 とあめはも角ゆりうさうと滌る
 おぬぐひとさうけいづれも湯
 ぐりうとん之門はして 伊八 サア

源おどんへくらり 源 マアさ
 くらりせ 伊 ナテかまうこと
 ぬくささくらり 源 マア
 を下りてさうさぬささ入へ
 らり 伊 とんあう作つ小便を
 ちのからうして 上踏次のワミズホベんさる
とさうりのかさりやの国さう
 せしとけく小便いありまを 伊 亦
 たりやアぬめんあせく大ワさひど

お又むりよのどろくちのめとぞ梅さんらら
おれてあまひいよんぞのけして梅さんらら
梅さんらら

おさんららあぐんあせくを伊井戸源を

あぐんららート二人内から内の及奥まで

おかきくはさうとあり原風へ名ひくさる舎
のまらう梅でをりアをを後春の引出ーの
くさんよと味ぢんのこの糸といもまつけらぬえ枝
りけてのら梅あいのうんごのよぞれく小袖よ
あまごさどましくらあぐんごんまの帯としめ
あしひくくくくくくくくくくくくくくくくくく
の梅田けけけけけけけけけけけけけけけけけけ
してそのぬきとらりてぬきとららぐかよせて

伊八さんけあるおさうくでさざりや

おモしおまんららちくおらであせく

源アイさくりようござりやと

つふあまのあゆいよとこーらまよクメ伊コウ梅

伊八ううーらのうとあくまらる

さんけ界アワのちりなざりざり

おとあさうつてんそくくらみうら連

てさやし梅よくお出あせくさぬ

へちりやアめうとめさるうらモシ

アのうとらうちくお出あせく
 ころちやアのう伊八さんもあつて
 びあせくもろとんぶがらちうやう
 のんとちうあれり源是くおあん
 中イとねらうてイ武士のほさ
 やいのくイひねイとイもイ
イコウ源イのらとらちく
 さいらイはイのらちくとち

うてはイようイくイてイやイ
 よとらりうあんイよイ
 めんよくイぬイ
イ源イとつめらやアイ
イとイやイのイ
 りうとらちくお出あせくイ
イ源イのイ

け男ア何しやうく〜とあひまゐら
 梅 とふもあれやせん計程してまら
 せしへ、計程外らそのとあれ中〜た
 えととんやうく、伊 おあひとかきま
 らやアあれらりら〜アあ〜さ
 あ〜さよ本業やと〜ん〜れら、梅 伊
 八さんおめく清明丹久、伊 かんよめ
 けの〜らり又〜とれ〜さや〜

いま〜いり〜れ〜るがある、計程外ら
 けのあ〜と〜ら〜りせりそのたをこ入、梅
 けら減子ひぬら〜たを〜ら〜南一と出、梅
 さん〜らやアけ男が弟子入の何サ、
 梅 伊 かんよめ
 梅 とふもあれやせん計程してまら
 せしへ、計程外らそのとあれ中〜た
 えととんやうく、伊 おあひとかきま
 らやアあれらりら〜アあ〜さ
 あ〜さよ本業やと〜ん〜れら、梅 伊
 八さんおめく清明丹久、伊 かんよめ
 けの〜らり又〜とれ〜さや〜

老りらんやのめい **梅** 伊八さんおとつひ
 くらりらんりのじ **梅** 伊八さんおとつひ
 おめくのめくをぬり **伊** フウど
 くらりらんよとらん **梅** 百川よたあ
 かわりてさ **伊** 頃目いざ **梅** ころい
 てごごりやと **梅** ぬる居流のあ
 合がやんでうらうら **伊** けうら
 ぐまざらうく **梅** とえな **梅** モしおん
 さいてこれてある **梅** 心つ **伊** コウ源ま
 ぞうどめや **伊** コウ源ま

せんとりんうらんぬく **源** けい **梅** の
 せんのかさう **梅** せん **梅** の **梅** の **梅** の **梅** の
 一めでらんや **梅** せん **梅** の **梅** の **梅** の **梅** の
 まりうて **梅** の **梅** の **梅** の **梅** の **梅** の
 とんて **梅** の **梅** の **梅** の **梅** の **梅** の
 りん **梅** の **梅** の **梅** の **梅** の **梅** の
 茄子れめ **梅** の **梅** の **梅** の **梅** の **梅** の
伊 コウ源ま **梅** の **梅** の **梅** の **梅** の **梅** の
 めんめく **梅** の **梅** の **梅** の **梅** の **梅** の
 ぶる **梅** の **梅** の **梅** の **梅** の **梅** の

とあつてい **伊** ところやアアアアいのぬうらん

と **梅** ありさういともあつてさういささささくさくさくさく

いさう方若うしてさや中のわりもすこまやこいさう

のらんそあはらりさらんらおあまありもさん

とめはえさうあさらんもさるさいけいさやも

はあさとしてさるさうしてさるさうさうさうさうさうさう

のめさよあささるさうさうさうさうさうさうさう

ア **梅** せんくち **梅** まささんくちらんと

あめんへ **伊** あんのイサもあん

ア **梅** まささんくちらんと

あめんへ **伊** あんのイサもあん

ア **梅** まささんくちらんと

あめんへ **伊** あんのイサもあん

ア **梅** まささんくちらんと

あめんへ **伊** あんのイサもあん

ア **梅** まささんくちらんと

あめんへ **伊** あんのイサもあん

ア **梅** まささんくちらんと

あめんへ **伊** あんのイサもあん

ア **梅** まささんくちらんと

あめんへ **伊** あんのイサもあん

るせづく 源 又あとのどんいんあよに
 のちんでらんねく内がのうあまら
 ねくけりやアりが 伊 ところちのあ
 ちうもやうぬふアおやのこい
 そふもねく十 十のそふこくねたまさの
どこれもにわをさうてん とらついで店うれぞ あんぶややうもや
 くのふやど よ 後グミドクひぞこくが
 勤つらのきぶやうつてらぬとく 母 も

ちうとちあーあをらつてもようら
 う 店 店でも又ぶらりやどかづら
 ぶやそれよやさういららうもい
 ていさをつりまやあらんぶや 梅 梅
 さんそれでもあめく あめく 頃日石場の考
 倉一又あさんあをらうまぶね ト ね ト ね
入のてうれいけのわうらういさがア
 せんあめいふてよやせいのんぶや

我まづいふや孝の翁の骨の榎とも
みゆきとどく親の臣下のごとく我
子小うやまひうづこ味線糸
とくつさ下弦とあどとてろり皆
欲の皮より出て三弦の皮よりも
のつー又それらがとてろりささぐぬ
るふろろり中れりの子あは漢
士よての妓とらて莫秋心陽阿翠

翹るどくいふ名妓多し和國とてハ
白拍子とよび嶋千歳和歌前を
どせく子名ありりのかぞへ
雛一今れ女流をまひ流れと謂
べしよるかまてい流子舞子とらひ
江戸とも前子ハ踊子とらひ
元文のそとめふ名をさし衛門照
艶あどありそは後辨天豊地藏

七

幸。あどそれめさなり。新富直百
合。秋。あどらり。是よつて
唯人の愁と忘れあむ。器あり
あられども今をさうえくこれら
よ比とく者さうい

豊後畢

申

酒氣貧通

町傾城辛苦情幹

通子

町馴染傾城

傾曰

主不遠千里而來亦將

有以

見艷書乎

通子

妾曰君何必曰茶終爲

腎虛

而已矣

茶言虛也

田の中に梅のきく申す

叔い申まうし。柳やなぎのつらきあつち申まうしくといふじ。
花はな乃なほく申まうしよましたといふとこもなほそれ
くの男おとこの業わざらり。人ひとるあつちさあぐよ。
世よつらうす。中なかつもあまあしす。よまき流ながれ
の男おとこがうらあつちの老こらうとらくどと
そのうちあも無なあり。ほれ程ほど忘わすれ
ぬのなぐ。惚おぼまらねさわど捨すぐさまの
なり。友ともふ去いぬ。大おほき屋やといふふ

花はな衣えといふ娼婦しょうふあり。彼か々々空そらよ員士いんし井い回わい
義ぎ士しといふ整ととの治ちあり。きざしよなれは
ほまられつ。かのうらねぬと捨すつさう。
らりし。終はつよ中なかつ極まま。二人ふたり中なかつ
い深ふかれども。何なに竹たけの中なかつ取と取と思おもひあり。
水みづの又またぬきさる。よさふ胸むねのかぐさる。
やあんとせし。お力のまの口くちを引ひと
しきう。その育そだち。あつちあつちを

今世の世の中に。又この世にまゝにせよ。
一重連とよめやう友よ。骨^{しんきよ}虚して死ぬる
思ふとつゞき道程はきり。又ハ金^{こま}がうんと
ありし連。氣をまじらぬ痛くて死^し或は命^{いのち}の物
して命をうりやうも足らぬ金^{こま}の事
下^ひ早もも得つづいおれし一女の道そ
果^はる事しを願うなり。世界の人皆その
穴^{あな}門より生まれぬ。又そのおふ死を是

沈^{しず}み根よるるの道程はやまのこ。定規
移^{うつ}りにしう。不^ま了^{りえん}なる。二ツツれ命を
一女のあふ捨。命^{いのち}死を自^じ悔^ましし^く巖^{いわ}を
母^{はは}ははしりて。あやうるう娘^{むすめ}はしよ
長く耻^はをあらう。懐^{なつか}しうのおまらふ
よめれし。今時の世の中へあまもあふ
情^{なさけ}をこしやう。唯^{ただ}不自由^{ふじゆう}夜^よのむら死し
又うの氣^{いき}をうむまこ娘^{むすめ}ハ。母^{はは}んご母^{はは}し

新内やーちやうき。志がらおをいへ度よ。
半七之猪々死んむとや。おれをえ
久ねが切中へなほとや。あはれ
まくに恋の情をつくーう命と
捨さよふま。わさうとも捨子のせぬ
とまふ痴なるをより切中死をう
中ぬーけれど。あざうてさるを中へあむ
おが板どやわく大の業をむむらつうい

たふれい。あまのこいさうきおに
一將の美服は言のあうらうらうら
の程に。是がめんまのゆるる。一ッ所
おこし母よ。あまのあはれさう。又しる
まらる中へさうらうらあまのあうら。福ま
よ。今死ぬる身で母さうらわがうらあはれさう。
さうあまの母のさうらうらあまのあうら。お
あはれさうらうらあまのあうら。あはれさう

わすく。體たいを毛け體たいをかきふる。一とたてへる。一
二階かいぐぐ体息たい一。一。今の中いまのちゅうを
まじりておのれおのれにまじりておのれに
と。切き為い一とてまじりておのれおのれに
たぐ。今の中いまのちゅうをかきふる。一とたてへる。一
たぐ。今の中いまのちゅうをかきふる。一とたてへる。一
中ちゅうへておのれおのれにまじりておのれに
たぐ。今の中いまのちゅうをかきふる。一とたてへる。一

今の中いまのちゅうをかきふる。一とたてへる。一
たぐ。今の中いまのちゅうをかきふる。一とたてへる。一
道だう世せの音おとのよき。一。世よおのれおのれに
まじりておのれおのれにまじりておのれに
うま。一。自みづから後あと一。一。日ひにた。一。人ひとは
たぐ。今の中いまのちゅうをかきふる。一とたてへる。一
まじりておのれおのれにまじりておのれに
たぐ。今の中いまのちゅうをかきふる。一とたてへる。一
たぐ。今の中いまのちゅうをかきふる。一とたてへる。一

ちりせたるし。我をれいひ刀とるも命
をまじとさやよあさめ。まぶくくさるし
まろふ。地差をけうちすめ。あひらて
んるもめく公中死もまふめん。天令
じやと獨ひとぼさるしとの違まよまめよ
二人が延命地差を。利益のわどそあ
うきま
申畢
京傳予誌 大尾

自跋

夫洒落る志と難し。黃山谷が曰。
周茂叔が人品甚高し。胸中洒
落るれま支光風霽月の如し。
是等を洒落の親玉と謂し。
然れハ世界が洒落悉比皆

洒落^{シヤレ}不^レあ^レ。於^レ是^ニ予^ハ。
 主^レ中^ニ本^ハ不^レ洒落^ス。亦^ハ。
 幸^ハ。志^ハ。

戲作目錄

書林大觀堂

伏見屋善六

故人平賀源内戲作
風來六部集

全二冊

此古の當世伝のりとも聊筋を七振元
よりして古今の習俗のゆきなりを世に
て伝へて世に平賀ぶりと稱す

同
カバ文選

全一冊

聊筋本の序文狂文狂言より一ツツ
仕出の物語の行札やことごとく而席の
にむかひ文系成つては懐力となる也

日作
虚實山階辨

全五冊

此古の當世伝のりとも聊筋を七振元
よりして古今の習俗のゆきなりを世に
て伝へて世に平賀ぶりと稱す

日作
秘術工夫箱

全三冊

知恵の術をよきよき
一向の死後をよ

繪本室武振

級神と武者小
仕立あり

万葉亭述
福神粹語録 全二冊

宝祿の七徳作を金取者坊主
去介老ひの姿を女一老来を
女郎の福を本古今のしき
ま回る目むかひかりに
幸あり

山東京傳著述

熟語 志羅羅川夜舩 全一冊

懸禱の越川を新羅子
風風の麻屋のとりつけ
いとむく夜見世の松子先
時よ登上田文書とのりと
ふりといん終るに時伴
さておいてあいな傾城も
あうり

ひやうく 百福壽 全三冊
又三町

森中良先生述 千古 梅冊帛 全四冊

西大人戯作 全一冊
このころのちても
ひきのさるるあし
此書の英草紙
奇傳改めり
あうり

山東京傳著述 京傳予誌

尚世子とめりく男女の人情
とさぐりそのゆかり
つて四書のうさ
しる小冊あり

京傳閱 遊 文選卧坐

吉原深川の流
妓客の風俗と穿遊子の
一笑と傳とをあり

新作 壽類賀紫瓜 落咄

一河齋純通作 古々踏鬼 讀本 五冊

東 都 名所浮繪鑑 彩色招一冊

神社仏閣の句端
尋常本を其怪
伝多の遊子
より世展ふ

文獻卷三十七卷三十一百六十八

卷三十一

